

故郷を守る 酪農の夢

継いだ牧場を再建した阿部俊幸さん(28)



リアス式海岸で土地の起伏が激しく、平地が少ない。そんな南三陸町の山間部に、戸倉日向地区はある。国道45号沿いにあった集落は津波で壊滅し、いまはわずかな家屋と田んぼだけの風景が広がる。阿部俊幸さん(28)は昨年7月、そこに「日向牧場」を再建した。

朝と夜、11頭の乳牛にワラや飼料を与え、汚物の掃除をする。乳搾りは1日2回。今後、牛は20頭まで増やす予定だ。先行きは楽観できないが、酪農を再開できた喜びをかみしめている。

2009年、21歳のときに、負債を抱えた牧場を祖父から継いだ。牛のひづめを削る仕事をしながら、牧場の経営立て直しにあたった。ま

ず、餌代に目をつけた。コスト削減のため、新しい配合の餌を試した。牛は、餌の量が数々違うと体調を崩すこともあるため、数頭ずつ慎重に試していた。10頭の乳牛すべてに与えるまで、2年ほどかかった。

揺れの後、黒い壁のような津波が集落に押し寄せた。のみ込まれた自宅や牛舎が、がれきに押しつぶされた。渦の中から牛の絶叫が聞こえた。何とか、ただ途方に暮れ

4日後の3月15日。牛乳を出荷している農協から、携帯



乳牛に餌のワラを与える阿部俊幸さん(南三陸町戸倉日向)

去った若者 呼び戻す礎に



震災直後の阿部俊幸さん宅や牛舎周辺の様子(南三陸町戸倉日向、阿部さん提供)

電話に連絡があった。餌代を切り詰めた成果もあり、前月の牧場の収支が、初めて25万円黒字になったと知らされた。

諦めきれなかった。だが、酪農への支援は乏しかった。県の出先機関に相談したが、「酪農の盛んな北海道へ行けばいい」と言われた。時間だけが過ぎた。その間に、周囲にいた若者の多くが町を離れていった。

揺らぐ気持ちを支えたのは、志津川地区で酪農を営む先輩の存在だった。震災直後に阿部さんがいた避難所に来てくれた。

「仕事、どうすんの」「迷ってます。仙台に出稼ぎにも行きますかね」半分は冗談だが、半分は本気だった。すると先輩は、ひづめを削るときに牛を固定する器具をくれると約束してく

あ の と き

津波は、海から約1.5kmの山あいにある阿部さん宅まで押し寄せた。阿部さんは裏山に避難し、難を逃れた。自宅や近くにあった牧場は流され、約15頭いた乳牛なども犠牲になった。仮設住宅での生活は、昨年12月に自宅を再建するまで続いた。

「ウチの牛10頭のひづめを削ってくれればいいからさ」以前から、牛の搾乳方法や体調管理など、酪農のイロハを教えてくれた兄貴分だった。「酪農で生きろ」というメッセージにも思えた。削蹄の仕事で収入を得ながら、牧場を再建するために動いた。昨年春、金融機関から土地を担保に数千万円の融資を受けた。借金完済まで20年はかかるが、迷いはなかった。自分を支えてくれたこの土地で生きていくことを決めた。

いま、阿部さんの中では、人口が減った地域を盛り上げる夢が膨らんでいる。ヨーグルトやチーズなど加工製品への挑戦、酪農や漁業の体験など町の自然を生かした観光プログラム作成……。いつの日か、町に若者を呼び戻したい。その礎になるつもりだ。

(木曾尚人)